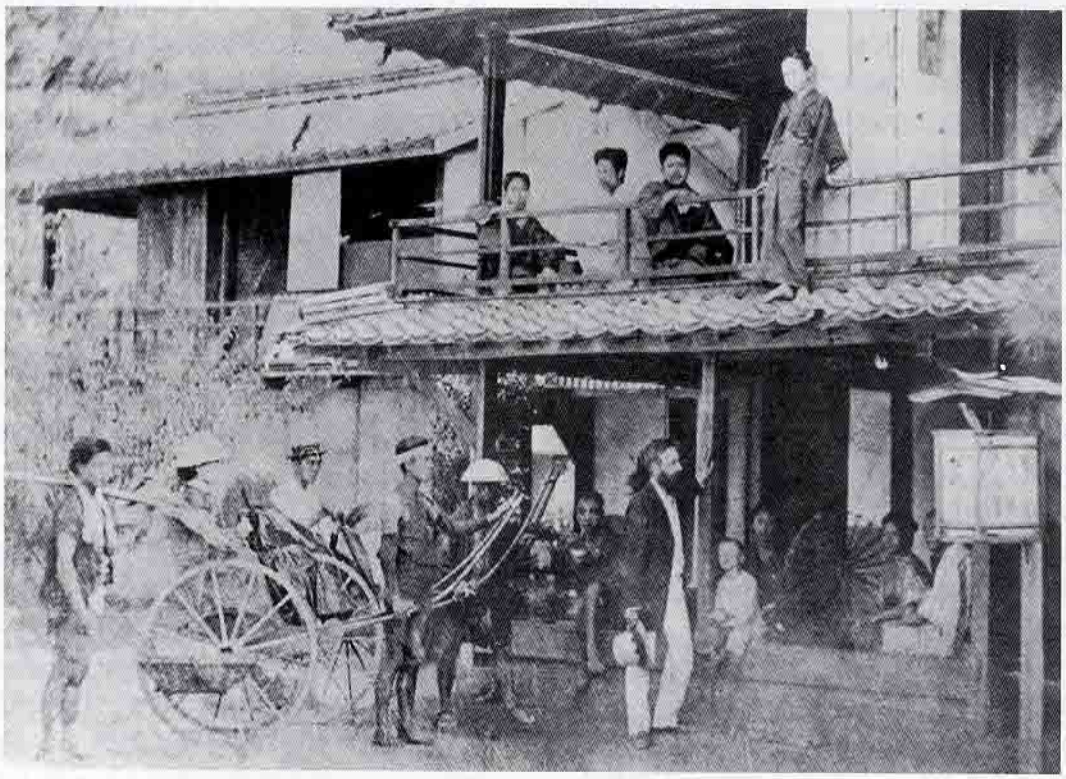
ISSN 0919-4339

九州大学
大学史料室ニュース

第11号　1998.3.20

目　次

九州大学学術調査団によるシルクロード調査
－比較教育学班を中心に－……2
大学アイデンティティと大学アーカイブズ……4
九州大学史料収集・保存に関する委員会名簿…6
九州大学大学史料室名簿……7
受贈図書一覧……7
大学史料室日誌抄録……8



御雇外国人デーニッツと福岡医学校の教諭達（明治18年８月）

九州大学の前身校＝福岡医学校時代の写真である。一時期、『日記』で著名なベルツ一行のものと言われていたが、フリードリッヒ・カール・ウイルヘルム・デーニッツ一家と、彼の東大での教え子達であることが判明している。階下中央デーニッツ。階上に座る日本人は、いずれも東京大学医学士の福岡医学校教諭達で、左端が大森治豊(後、福岡医科大学学長。外科)、中央榎本與七郎（眼科)、右端池田陽一（産婦人科)。帰国を前に来福した恩師一家を歓待するために集まったものであった。九州大学の前史だけではなく、福岡における近代医学史を知る上での貴重な史料である。

九州大学学術調査団によるシルクロード調査
― 比較教育学班を中心に ―

権藤　與志夫

1986年、私たちは「中国新疆ウイグル自治区の少数民族とその文化の特質に関する基礎的研究」（1987年度～89年度）のテーマの下で文部省科学研究費（海外学術調査）を申請し、幸いにも交付が決定した。

この調査研究の目的は次のようなものであった。古来、東西文明交流の接点であった新疆ウイグル自治区の少数民族、特にウイグル族、カザフ族、及びシボ族を主な対象とし、①自然環境　②遺伝的特質　③社会・文化的特質の三次元に関して学際的・国際的組織により現地調査を実施する。これにより、これらの諸民族の歴史的変化と現状に関する総合的理解を得る。これが第一の目的である。さらに、「日本人」「日本文化の成立過程」に関する基礎的資料を得ること、これが第二の目的である。

この科研費を中心に編成された九州大学新疆ウイグル自治区調査団のメンバーと研究テーマは次の通りである。権藤與志夫（研究代表者、教育学部教授、比較教育学）、分担テーマ「新疆少数民族青少年の教育と価値意識に関する研究」。西谷正（文学部教授、考古学）、分担テーマ「考古学からみた西域文化の展開に関する研究」。丸山孝一（教育学部教授、文化人類学）、分担テーマ「少数民族教育の展開に関する研究」。森川哲雄（教養部教授、東洋史学）、分担テーマ「北疆地域遊牧民族の歴史学的研究」。中田稔（歯学部教授、小児歯科学）、分担テーマ「歯科人類学的見地からみた中国少数民族の特質に関する研究」。藤野武彦（健康科学センター・医学部併任助教授、循環生理学、生理人類学）、分担テーマ「ウイグル自治区住民と日本人との生理人類学的対比」。増田泰久（農学部助教授、草地学）、分担テーマ「遊牧的畜産技術の草地学的研究」。以上が発足当時の陣容であるが、さらに文学部の久保智之（助手、言語学）、分担テーマ「北疆地域遊牧民族の言語学的研究－特に錫伯語を中心に－」が1990年から加っている。

調査団は1987年に第一次調査（実質的には予備調査）を、翌1988年には第二次調査（本調査）を実施することができた。しかし、1989年の補充調査の予定はその年の６月天安門事件が起き、現地での調査は不可能になり、状況確認と連絡ということで少人数で現地訪問を行った。この調査団によるウイグル自治区調査はその後も継続して今日まで実施され、さらに、この調査団の活動を契機として、九州シルクロード協会が1991年１月発足している。

本稿では紙幅の制約もあるので、上記研究グループのうち、私が直接担当した比較教育学班の調査に限定して報告することにしたい。しかし、これに入る前に、このシルクロード調査行が実現することができた経過ないしは背景として、最小限次のことを記しておきたい。

第一には、当時九州大学の学長であった田中健藏先生とそのあとを継がれた高橋良平先生の御指導と御援助についてである。田中学長は外国の大学との学術交流協定の締結に大変御熱心であり、1985年中国新疆師範大学から協定の申し入れがなされた時も積極的に対応され、その結果、1986年後任の高橋学長の時に協定が調印の運びとなったのである。この協定がなかったならば私たちのウイグル行きは実現しなかったであろう。田中学長も高橋学長も超多忙のところ、後に直接御自身でウイグル自治区を訪問して頂き、私たちの調査及びその後の九州シルクロード協会の成立と発展のために多大の御援助を賜ったのである。この機会に改めて両先生の学恩に対し深く感謝の言葉を捧げたい。

学術交流協定の推進の衝に直接に当たるのは九州大学においては国際交流委員会である。当時の委員長は歯学部の中田稔教授であり、教育学部からは丸山孝一教授が委員として参加していた。中田教授は過去にナイジェリアで現地調査を行い、丸山教授もタイ、韓国等で調査の経験があり、両教授はこれらの豊富な体験を基に、1986年、新疆師範大学との協定締結の準備のためウイグル自治区を訪問し、新疆師範大学と協議を行い、協定調印のために重要な役割を果たされたのである。さらに、上記の共同研究グループが多くの学部にまたがって発足するにあたって、その人選等チーム編成の初期作業を推進されるなど多大の労苦を惜しまれなかった。この機会に両教授の卓越したイニシアティブに対して心から敬意を表したい。

さらにまた、ここで忘れてならないのは地元福岡の有力企業を始めとする関係各方面から頂戴した数々の御支援と御協力である。大規模な海外調査となると多大の資金を必要とする。数次にわたる文部省の科研費はもちろん根幹をなすものであるが、それだけでは私たちの学際的な大がかりな調査隊の台所はまかなえない。福岡で募金をするとなればお願いに行くところは大体きまっている。私たちも大変恐縮ながら九州電力を始めとする有力企業の皆さんに御協力をお願いした。五次にわたる調査はこのようにして実現し得たのであり、衷心より感謝申し上げる次第である。調査研究費については、九州大学の財源の中から二度にわたり御援助を頂いたことも併せて御報告申し上げ、当時の関係の方々に謝意を表したい。

ウイグル族の小学校の教室

次に比較教育学班の調査研究について紙面の許す限り報告したい。参加者は私のほか、教育学部の望田研吾助教授（現在教授）、竹熊真波助手、九州大学留学生センター白土悟講師（現在助教授）及び新疆師範大学から九大に留学中であったデミアン講師であった。

主なテーマはウイグル自治区青少年の価値意識の調査と数学の学力調査である。社会主義的価値観が青少年や成人の間にどの程度受け入れられているか確かめたいと考えたのである。87年の予備調査後、88年の本調査を実施した。調査項目は人生観、労働観、職業観、自国観、外国観など27項目。結果は拙編著『ウイグル―その人びとと文化』（朝日選書424，朝日新聞社，1991）や私の学位論文などで報告している。

ここでは質問紙調査のごく一端だけ紹介する。価値観に関する「望ましい暮らし方」の設問があるが、これは戦前、戸田貞三博士が作成したものである。問「人の暮らし方にはいろいろあるでしょうが、次にあげるものの中でどれが一番あなたの気持ちと近いですか。一つだけ選んでください。」

1　一生懸命働き、金持ちになる。　2　まじめに勉強して有名になる。3　金や名誉を考えずに自分の趣味にあった暮らし方をする。　4　その日その日をのんきにくよくよしないで暮らす。

5　世の中の不正を押しのけてどこまでも清く正しく暮らす。　6　自分自身のことは考えず国家社会のためにすべてを捧げて暮らす。

その結果であるが、漢族の場合、「国家社会のためにすべてを捧げて暮らす」という徹底した社会派は小学校から学校段階が上がるにつれて顕著に減少する。大学生では僅かに１％にすぎず、教師でも11％、親も29％である。他方「自分の趣味にあった暮らしをする」というマイペース派は逆に上学年になるほど多くなり、６割前後に及ぶ。漢族では青少年、教師、親を含めて社会派よりも個人派的な生き方を選ぶ者が多い。ウイグル族の場合、「有名になる」と「清く正しく」が優勢である。1989年６月、天安門事件の直後、ウイグル自治区から専門家を招いて、このような結果について解釈を求めた。「有名になる」はウイグル族が信仰するイスラムの教えと一致する。イスラムの諺に「人生は短い。何を後世に残すか。それは名声しかない。天国での生は長い。名声は天国で永く残る。」「清く正しく」を選ぶ理由としてはウイグル族は少数民族であり、権力を握っている漢族への不満や不平が強い。要するに、イスラム信仰という宗教的理由に基づいて「不正を押しのけて清く正しく」という意味での社会正義派が多いと有識者は解釈を提示している。

比較教育学班は1990年、天安門事件後、さらに同一内容の質問紙調査を行い、同事件の影響を確かめることができた。しかし1991年に再び調査の申請をしたが政府の方針が変わったとして断られた。ソビエト、東欧の大きな変動が背景にあった。数学の学力調査では漢族とウイグル族の間に大きな学力差が見出されたが詳細については、教育学部・比研紀要を御覧頂ければ幸である。

（中村学園大学教授/九州大学名誉教授）

大学アイデンティティと大学アーカイブズ

小川　千代子

大学アーカイブズ

外国、特にアメリカの大学にはアーカイブズが置かれている例が多い。1980年、当時筆者が勤務していた東京大学百年史編集室は、郵便によるアンケート調査で、200近い大学からの回答を得ている。東大では当時、大学史編纂終了後、収集した資料の散逸を避けるための方法として大学アーカイブズを設けてはどうかという考えが提示され、その世界的な実態を把握するために行った調査であった(『東京大学史紀要』第5号、P.138～)。

この調査で把握した実態とは、大学アーカイブズは、大学に関する記録を収集・保存し、利用に供する施設であること、一般的に規模は小さく、予算やスペースに問題を抱えていることなどであった。また、米国にはアメリカアーキビスト協会というアーキビスト団体が1936年から設けられていて、その中には大学アーカイブズ部会が存在していることなど、主としてアメリカの大学アーカイブズの状況が広く把握された。このことは、当時あまり注目されなかったが、日本の関係者の基礎的な知識を形成するのに大きく役立ったものと思われる。

それからすでに20年近くが経過した。当時すでに20年以上の歴史を持っていた東北大学記念資料室、1988年に発足した東京大学史史料室はじめ、国立大学でも大学アーカイブズを備えるケースは順次増加している。筆者が大学アーカイブズのことを真剣に考え始めていたころ、「それは歴史の補助学である」「非主流の仕事だ」などと曰った東京大学百年史編集室執筆員諸氏は、今日の大学アーカイブズの普及ぶりをどのように受け止めているのだろうか。

テキサス州立大学オースチン校アーカイブズ

1985年、アメリカ・テキサス州立大学オースチン校ベントレー歴史センターにある大学アーカイブズを訪れたのが、筆者最初の外国の大学アーカイブズ訪問である。テキサス州立大学オースチン校には、ジョンソン大統領図書館もあって、アーカイブズの整備は進んでいると感じた。しかし、大学アーカイブズはベントレー歴史センターの一部に組み込まれていて、書庫の一隅に整理途中の資料の箱があったぐらいであまり重視されているようには見えなかった。

この大学アーカイブズの担当者は、控えめで地味な男性だった。度の強いめがねの向うであくまでも控えめな調子で、「資料の整理はなかなか進まないものです。でも、まずは収集して、保存する。整理は時間をかけて、いつの日にか公開する、それがアーカイブズとして資料を生かす道です。」と語った言葉には、なんだか宗教的な確信さえ感じられるほどであった。捨てないことが保存の大前提、と言うことは、このときの訪問で学んだことである。一方、同じとき、カリフォルニア州ロサンゼルスのUCLA大学アーカイブズも訪問したが、こちらのアーキビストは、「何といっても大学の記録管理プログラムとの連携こそが、大学アーカイブズを確立するのに重要です。」と言っていた。この記録管理プログラムと言う言葉が当時筆者には理解できなかった。

大学史と史料の保存・利用

昨年11月、日本で初めて大阪大学出版会から『文書館用語集』が刊行された。文書館と史料の保存利用に関する用語1000語を収録し、簡潔で平易な解説を加えた用語集である。「大学」のつく項目では、大学アーカイブズ、大学史資料、大学史編纂の3項目が収録されている。これを見ると、「大学アーカイブズ」は、大学史資料を保存し、公開する機関で、大学史料館・大学資料室と呼ばれることが多いと定義されているが、大学史編纂の隆盛ぶりに比べると、まだその設置は決して十分でないという。「大学史編纂」の方は、昨今では学術成果としての性格が強調され、編纂経過も含めて大学史紀要などで発表する傾向が強くなってきている。大学史編纂は新たな研究分野として開拓されたようだ。

大学史編纂が新たな研究分野となれば、当然その研究材料である大学史資料についての考察と定義づけも確立してくる。「大学史資料」は、大学が発行するあらゆる印刷物や大学運営文書だけでなく、学生が作成する試験答案、レポート、卒業論文などへもその幅が広がってきている。ただし、通常は、図書館が資料として受け入れている大学の研究紀要類など、大学教育研究の成果は除外しているという。

大学という組織の歴史を専門的研究的に解明してそれをまとめるのが、昨今の大学史の編纂である。それを行うには、大学の運営文書、大学が発行するあらゆる印刷物などを基本とした大学史資料が保存され、公開されていなければならない。そのニーズに応えるのが、大学アーカイブズである。文書館用語集にある「大学」に関する3項目には、そんな相互関係が見える。だが、大学史編纂という研究分野のためだけに大学アーカイブズが必要なのだろうか。

組織あれば記録あり

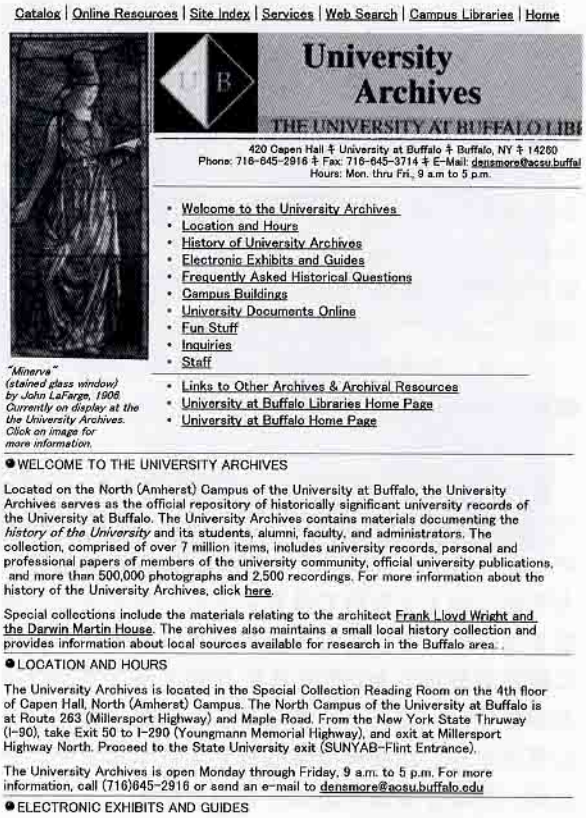
日本は、大学史に限らず、自治体史、会社史など、組織が自らの足跡を節目ごとに取りまとめることは珍しくない。過去を知らずして前には進めない、温故知新を歴史編纂という事業のなかで実践しているということかと思われる。そうした歴史編纂事業が行われる時は、必然的に過去の記録をさまざまな形で収集し、それを利用することとなる。これもまた、組織の種類にかかわらずどこでも行われていることである。

人は自らの活動のためにものを書き、組織は組織活動自体のために記録を作る。大学を例にとれば、大学と言う組織を運営し、活動を維持するために、大学の評議会や教授会が開催される。その会議は、大学と言う組織の運営や、活動の根拠となる事項にかんする意思決定機構である。意思決定の結果は記録しなければ、確認することは困難だ。だから、意思決定の記録である教授会記録、評議会記録などが作成される。記録された意思決定事項に基づき、大学は運営され、活動する。このようにしてさまざまな意思決定の記録は評議会記録とか、教授会記録などの形で蓄積されて、時間の経過とともに蓄積量が増える。

記録の保存とその制度

通常、大学には、文書管理規程が設けられ、文書の保存年限を決めるための文書保存年限表が作られている。大学アーカイブズの考え方がある程度普及した大学では、保存年限を満了した文書が大学アーカイブズに移管されるなどの表現が盛り込まれている場合がある。でなければ文書担当部署がその処理を単独で行うのが通常だ。この文書管理規程をどのように作るか、ということが、1985年UCLAのアーキビストが言った記録管理プログラムをのことだと、最近ようやく理解した。

日本では文書管理規程があって、その中に文書保存年限表などさまざまな別表や様式が組み込まれている。これは大学に限らず、多くの組織に共通だ。そして、もう一つ多くの組織に共通しているのが、文書管理規程が定める保存規程があまり厳密に守られていないことだ。また、過去の時間の経過の中に、火災を中心とした不慮の災害による文書の喪失、あるいは主として「戦後」の混乱期のなかで意図的に行われた記録の廃棄＝焼却処分等、制度の枠を超えた理由で記録が保存されていないことがある。これは、超制度的な処理や事故の結果なので、しばしばその事実さえも記録されぬまま、記録の不存在だけがそのことを示す場合も少なくない。



バッファロー大学アーカイブズのホームページ

大学アイデンティティと大学アーカイブズ

組織あれば記録あり、記録あれば管理が必要となる。それは、組織の記録が組織の存在基盤を形成するものであるためだ。少し乱暴かもしれないが、ある組織の特徴的な記録物の蓄積こそが、組織のアーカイブズと言っても過言ではない。一方、組織の存在基盤を形成し、組織の特徴を表現する記録、それはまさに組織のアイデンティティそのものである。大学という組織で考えれば、大学のアーカイブズとは「記録」とか「文書」の形でその大学のアイデンティティを表現したものの集積だということになろう。

今一度、インターネットを通じて米国の事例に目を移してみよう。ニューヨーク州のバッファロー大学アーカイブズのホームページ(http://ublib.buffalo.edu/libraries/units/archives/)では、大学の沿革に関するさまざまな史料を一般公開している。キャンパスの風景の移り変わりを20世紀初頭から最近のものまで写真で提供したり、古い学生歌が数種類、音声で提供されるなど、その技術を余すところなく駆使した情報提供振りは、実に楽しい。遠く日本の地にいてさえも、その大学の特徴や沿革が、大学アーカイブズの史料から手にとるようにわかる。

ホームページで提供される情報を眺めていると、バッファロー大学という大学の伝統と誇りが画面から溢れ出てくる様にさえ感じられる(前頁写真)。大学をこのような形で世界にアピールすることができるのは、もちろんインターネットという技術に因る部分が大きいだろう。だが、バッファロー大学を愛し、誇らしく思っている人間の存在無くして、そうした情報提供は行えるはずもない。さらに、そのような「思い」を他者に伝える材料としての、大学史資料が、きちんと収集、保存、整理され、利用のための準備が整っていなければ、おいそれとバッファロー大学アーカイブズのようなホームページは作れそうもない。大学アーカイブズは、大学のアイデンティティの宝庫なのである。

蛇足・資料の分担保存について

組織のアイデンティティを示すさまざまな形態の資料は、図書館、博物館、アーカイブズの間で各々が扱う資料の特性に応じた範囲を協議のうえ取り決めた上で収集・保存するのが米国やカナダなどで行われている方法である。大学の事例ではないが、ニューヨーク州ロチェスタ市、カナダ・オンタリオ州ウィンザー市等の訪問調査では、所在情報の共有が行われていた。モノ、図書、文書の混成コレクションの場合は、コレクションの目録は一本化して作成するものの、資料自体は分割して、各々適切な保存環境を提供できる保存施設、すなわち、モノは博物館、図書は図書館、文書はアーカイブズに入れるという方法を講じている話を聞く機会があった。もちは餅屋、の考え方である。これが直ちに日本の状況に馴染むかどうかはわからないが、ひとつの解決方法ではあるだろう。博物館、図書館との連携については、九州大学大学史料室では、きっと全国に先駆けた日本の特性を生かした良い方法論を拓かれるものと期待してやまない。

(国際資料研究所)

九州大学史料収集・保存に関する委員会名簿

委員長	○教育学部	教授	新谷	恭明
副委員長	○農学部	教授	深尾	清造
副委員長	○石炭研	教授	東定	宣昌
	○文学部	助教授	佐伯	弘次
	○法学部	教授	植田	信廣
	○経済学部	教授	荻野	喜弘
	理学部	教授	青木	義和
	○医学部	教授	多田	功
	歯学部	教授	坂井	英隆
	薬学部	教授	前田	稔
	工学部	教授	萩島	哲
	シ情	助教授	正代	隆義
	○比文研	教授	有馬	學
	数理研	助教授	福本	康秀
	総理工	教授	中島	秀紀
	生医研	教授	木村	元喜
	応研	教授	高雄	善裕
	機能研	教授	小山	繁
	健セ	助教授	冷川	昭子
	言文	教授	松原	孝俊
	医短	教授	布上	董
	医病	教授	野瀬	善明
	歯病	教授	池本	清海
	生環研	助教授	北野	雅治
	熱研	助教授	林	靜夫
	情セ	助教授	古川	善吾
	アイセ	教授	大崎	進
	中央分析	助教授	坂下	寛文
	遺伝情報	教授	服巻	保幸
	留セ	助教授	清水	百合
	有化研	助教授	菊池	純一
	大教セ	助教授	長野	剛
	先端セ	助教授	中島	寛
	大型	教授	廣川	佐千男
	図書館長		小山	勉
	副学長		柴田	洋三郎
	事務局長		板橋	一太

○は専門委員会委員

(1997年12月1日現在)

九州大学大学史料室名簿

室　長	教育学部	教　授	新谷　恭明
室　員		講　師	折田　悦郎
兼　任	文学部	助教授	佐伯　弘次
〃	法学部	教　授	植田　信廣
兼　任	経済学部	教　授	荻野　喜弘
〃	比文研	教　授	有馬　學
〃	石炭研	教　授	東定　宣昌
事務補佐員			井澤　華子

(1997年12月1日現在)

受贈図書一覧（1997年7月～12月）

甲寅会誌　第59号～第61号
　甲寅会　1993.2～1997.2
平成9年度　会員名簿
　甲寅会　1997.11
An Approach to Diseases -Immunology, Hematology, Cancer-
　Edited by Yoshiyuki NIHO　1996
西村光雄教授退官記念誌
　西村光雄教授退官記念事業会　1995.4
退官講演論文リスト（九州大学応用力学研究所所報第82号別刷）
　川建和雄　1997.11
天草の海辺の日々
　菊池泰二　1997.10
北京同学会の回想
　那須　清　1995.11
九州大学教授文学博士山口宗之略年譜、著作目録
　山口宗之　1988.8
旧制高校生の異系学部進学（藝林 46巻4号抜刷）
　山口宗之　1997.11
山口宗之教授略歴・業績目録（歴史学・地理学年報第14号抜刷）
　山口宗之　1990.3
福田　殖先生　年譜・著作目録
九州大学中国哲学論集　第23号
　九州大学中国哲学研究会　1997.10
学院史料　Vol.15
　神戸女学院史料室　1997.5
井上円了センター年報　第6号
　井上円了記念学術センター　1997.7
サティア《あるがまま》　第27号、第28号
　井上円了記念学術センター　1997.7～1997.10
新島襄の大学設立への挑戦
　同志社社史資料室　1997.7
CREATE　21　No.3
　拓殖大学創立百周年記念事業事務局　1997.7
東京大学史史料室ニュース　第18号
　東京大学史史料室　1997.3
東京大学史紀要　第15号
　東京大学史史料室　1997.3
人文論集　第32巻第4号
　神戸商科大学学術研究会　1997.3
MUSEUM　KYUSHU　第55号～第57号
　博物館等建設推進九州会議　1997.3～1997.7
ニューズ・レター　No.4、No.5
　金沢大学50年史編纂室　1997.8～1997.10
毛利元就文書展―乱世に生き手紙を駆使する―
　広島県立文書館　1997.9
医史学展「近世の医学と福岡の医家」
　医史学展実行委員会　1997
東京大学創立120周年記念東京大学展―学問の過去・現在・未来
　東京大学　1997
年譜　東京大学創立120周年記念
　東京大学史史料室　1997.10
竹内理三先生と九州史研究（九州史学117号抜刷）
　川添昭二　1997.9
名古屋大学史資料室ニュース　第3号
　名古屋大学史資料室　1997.9
アカンサスニュース　第17号
　金沢大学庶務部庶務課研究協力広報係　1997.10
新島襄と徳富蘇峰―蘇峰永眠40年記念―
　同志社社史資料室　1997.11
県史だより　第91号、第92号
　西日本文化協会　1997.5～1997.7
文書管理通信　No.33
　ナカシャクリエイテブ　1997.7
東京大学展―学問の過去・現在・未来
　東京大学　1997.10

大学史料室日誌抄録（1997年7月～12月）

7．3（木）　第17回大学史料室運営委員会開催。
7．11（金）　古河機械金属株式会社社員、史料調査・写真撮影のため来室。
7．14（月）　歯学部同窓会より史料寄贈。
7．23（水）　国際交流課所蔵文書、史料室へ移管（～24日）。
7．24（木）　朝日新聞記者より、九州大学フィルハーモニー会の件につき照会。
7．28（月）　東京大学史史料室より、九州帝国大学海外留学生の件につき照会。
7．31（木）　森祐行工学部教授より史料寄贈。
8．4（月）　教育学研究科院生、教育学部年史編纂史料調査のため来室。
8．18（月）　森祐行工学部教授より史料寄贈。
8．19（火）　文学部事務長、学生集会所三畏閣の件につき調査のため来室。
8．22（金）　宗像郡各中学・高校生20名、大学史料室見学のため来室（新谷室長引率）。
8．29（金）　青陵会会員、史料調査のため来室。
9．2（火）　福岡シティ銀行より、戦前期工学部教授の件につき照会。
9．10（水）　国際交流課より九州帝国大学創設の件につき照会。
9．11（木）　古田鷹治農学部元講師、史料調査のため来室。
9．30（火）　青陵会に旧制福岡高等学校校旗貸し出し。
佐藤裕福岡赤十字病院外科副部長、医科大学関係写真借用のため来室。
10．8（水）　外川健一石炭研究資料センター助教授、写真用コンピューター・ファイリングシステム見学・調査のため来室。
10．9（木）　総務課より本学80周年記念事業の件につき照会。
10．12（日）　第41回教育史学会開催。折田講師、コロキウム（テーマ「大学史の編纂と研究状況」）にオルガナイザーとして参加。
10．13（月）　折田講師、全国大学史資料協議会1997年度総会・全国研究会参加（～14日。於東北大学）。
10．20（月）　「大学史料室ニュース」第10号刊行。
10．24（金）　折田講師、周辺教養科目（少人数教育科目）「九州大学の歴史」開講。
10．27（月）　折田講師、周辺教養科目（総合科目）「九州大学で学ぶこと」において講義。
10．28（火）　朝日新聞記者より、九州大学年史編纂の件につき照会。
10．30（木）　第18回大学史料室運営委員会開催。
11．14（金）　総務課総務掛・同秘書掛所蔵文書、史料室へ移管。
11．18（火）　箱崎公民館より史料寄贈。
11．19（水）　生体防御医学研究所木村元喜教授より、高山正雄元総長関係史料の件につき照会。
11．28（金）　『大学史料叢書』第6輯原稿入稿。
12．3（水）　森祐行工学部教授、史料調査のため来室。
12．4（木）　柴田篤文学部教授、史料調査のため来室。
青陵会会員、史料調査のため来室。
12．5（月）　青陵会より史料寄贈。
12．12（金）　仁保喜之医学部教授より史料寄贈。
12．15（月）　西村光雄名誉教授より史料寄贈。
12．17（水）　川建和雄名誉教授より史料寄贈。
12．18（木）　菊池泰二名誉教授より史料寄贈。
12．19（金）　那須清名誉教授より史料寄贈。
山口宗之名誉教授より史料寄贈。
柴田篤文学部教授より史料寄贈。
12．25（木）　森祐行工学部教授より史料寄贈。

九州大学大学史料室ニュース　第11号
発行日　1998年3月20日（年2回刊）
編集・発行　九州大学大学史料室
〒812-8581 福岡市東区箱崎6－10－1
電話・FAX（092）642－2292
Archives of Kyushu University
印刷　㈱サガプリンティング